

戦争を生き延びた者の記憶

小出 慶子さん（昭和 15 年生まれ）

開戦の前年に生まれた私にとって、戦争の記憶はおぼろげで断片的でしかありません。

敗色濃厚となった昭和 19 年頃、私たち一家は東京の目黒に住んでいました。空襲警報のサイレンが響き渡る頻度は日に日に増し、食糧の配給も滞ってきます。手に入ったとしても干した硬いトウモロコシや鶏の餌だったコーリャンなどで、8 歳を頭に、5 人いた食べ盛りの子供たちのお腹を満たすにはとても足りません。このまま東京にいても降り注ぐ爆弾と飢えから逃れて生き残る術はないと考えた母は、「疎開」を決断します。昭和 20 年春、知人を頼って島根県簸川郡平田町に向かいました。当時は汽車を乗り継いで丸 2 日の道のり、4 歳の私にはとても辛く心細かったことを憶えています。

一方、旧制中学の英語の教師をしていた父は、軍属の陸軍通訳として南方の占領地、シンガポールに派遣されていました。「降伏せよ!」とラジオ放送で敵兵に呼びかけたり、敵兵の戦意を削ぐために飛行機から撒くビラの内容を英訳したりする役目だったといえます。

しかし、日本軍の劣勢を受け、東南アジアの占領地も徐々に兵士の引き上げが始まり、父にも帰国命令が出ます。日本に向かう途中、乗っていた軍艦に敵の魚雷が命中、乗組員、兵士のほとんどが爆発の衝撃で海に投げ出され、溺死しました。父も海に放り出されましたが、泳ぎが達者であったため、重油の海を必死に泳ぎ、大破した船の破片になんとか捕まることができました。そしてわずかに生き残った人たちと協力して筏を組み、辛うじて浮力を確保します。たくさんの屍しかばねが浮くなか、お互いを励まし、大声で歌を歌い続け、一昼夜が経った頃、幸運にも日本の民間輸送船が通りかかり、救助されました。

こうして日本に辿り着いたものの、重油の混じる海水を大量に飲んでしまったため、下痢症状で体が弱り、広島陸軍病院に入院することになります。生死の境を彷徨さまよいつつもなんとか回復したあと、方々に手紙を出して家族を探します。なかなか行方がわからず困り果てていたころ、母がシンガポールに出した父宛の手紙が巡りに巡り、遅れて陸軍病院に届き、家族が島根県にいたことが分かったのです。

やっと歩ける程度の回復状態だったのですが、隣県にいるのなら、ということで昭和 20 年夏、父は島根県で家族と再会します。

やせ細り杖を突き、白い傷痕軍人の着物を着た戦闘帽の父を私は父と思えず、近づくと怖くて遠くから様子を窺っていたのを憶えています。そして程なく広島に原子爆弾が投下され、陸軍病院は跡形もなくなります。またもや父は九死に一生を得たのです。

疎開先でのもう一つの記憶は、住んでいた長屋の川向うから、寝入る頃に響いてきた、唸るような、叫ぶような大勢の歌声です。そこには練兵場*があり、特攻隊*への志願兵を戦場にする宴会が毎晩のように開かれ、皆で軍歌「同期の桜」を大声で歌っていたのだと、後に母から聞きました。

戦後、私たちは東京に戻り、父は教職に復帰します。そして旧制中学の教え子の多くが戦死したことを知り、彼らと同年代の新しい教え子たちと接する中で、彼らの無念を語り継ぐために、自分は生かされたのだとの思いに至ります。父は機会あるごとに人々に戦争を語り、多くの人々の死を無駄にしてはいけないと説き、不戦を訴え続けました。戦争で悲惨な死を遂げた兵士や若者たち、大勢の尊い命を礎に、今の平和と繁栄があるという思いを胸に生き続け、昭和が終わった年、80 年

の生涯を閉じました。

*練兵場…兵士戦闘の訓練を行う場所 *特攻隊…敵艦に体当たりする飛行攻撃部隊

(原文のまま掲載しています)



現在の島根県出雲市平田